

村上込の内遺跡と同遺跡出土の長頸瓶（壺G）について

蕨 由美

1 はじめに

「村上込の内遺跡」は、古代の印旛郡村神郷に比定される遺跡であり、1973～74年に村上団地造成に先立つ発掘調査で、竪穴住居跡 164 軒・掘立建物跡 24 棟が見つかり、古代（奈良～平安）の大規模な集落跡として注目された遺跡である。

調査報告書『八千代市村上遺跡群』(1)ほか、天野努氏、笹生衛氏の研究論文も数多く出され、その成果は、千葉県史(2)や八千代市史(3)に反映されている。また、国立歴史民俗博物館においては、1989 年開館時に、古代村落の代表事例として復元景観のジオラマとともに、瓦塔の破片なども展示された注目すべき遺跡であった。

その後、新川西岸のゆりのき台の造成に伴う萱田遺跡群、東京成徳大学その周辺の上谷・栗谷遺跡の発掘調査が行われた結果、出土した墨書土器などによって村神郷の範囲が村上地区から八千代市全域に拡大され、またこれらの遺跡群を対象とした古代遺跡の研究成果が提示されている。(4)

その詳しい内容は県史・市史に譲るとして、今回は、村上込の内遺跡から出土した「長頸瓶」（註 1）に注目し、この用途を考え、これによりこの遺跡の持つ意味を明らかにしたい。

2 八千代市内の古代長頸瓶（「壺 G」）

八千代市立郷土博物館の古代の集落のコーナーに、二つの細長い壺(図-1、図-2)が展示されている。自然釉がかかり、須恵器としての美しさは、そのプロポーションとともに目を引く。

図-1 が、村上込の内遺跡出土の長頸瓶で、口縁部が少々欠けている。報告書(1)には、長さ 21.4 cm、濃灰色で、「後代の『花瓶』に類する器形となる。」との注が記されている。

図-2 は萱田遺跡群の北海道遺跡から長頸瓶で、完形品である。

ともに、奈良文化財研究所が須恵器の壺の形状をアルファベット順に分類した際、「G 類」に定められた須恵器で、「壺 G」と通称される典型例である。

図-3 は萱田遺跡群の井戸向遺跡の報告書(5)に、D023 号遺構から出土、青灰色、体部以下欠損と記された長頸瓶の図で、これを含めて、八千代市内の遺跡から計 3 点の壺 G が検出されている。



図-1 村上込の内遺跡
出土の長頸瓶（壺 G）

3 壺 G の特徴とその用途をめぐって

壺 G は、8 世紀末から 9 世紀初頭に静岡県の花坂島橋窯と助宗窯で生産された長頸壺のことで、形は太型から中太型・細型まで、少しだけ型式変化するが、いずれも高さ 20 cm 位の細長い形で頸が長く、堅牢で優雅な形をしつつも、ほとんどが平底で糸切痕、ロクロ回転痕を未調整のまま残すなどやや雑なことが特徴である。

器形は、太型・中太型・細型に分類され、中太型・細型ともに、北日本～関東～東海・近畿地方に広く分布する。存続年代が 770 年頃～810 年頃の中太型が最も多く、次いで細型が多いが、細型の時期は 784～794 年の長岡京期に限定される特徴がある。八千代市の込の内遺跡と北海道遺跡の 2 点は、中太型であろう。(6)

壺 G 用途は、「堅魚煮汁容器説・水筒説・徳利説・花瓶説など諸説あって定まらない」とされてきた。

巽淳一郎氏の堅魚煮汁容器説は、木簡の記述から「伊豆や駿河から堅魚製品を都へ納めた」容器との説(7)で、その後、関東から東北、海のない山梨県からも出土していることなど、また瀬川裕市郎氏から「運搬に用いる必然性はない」という異論(8)もあり、その説は揺らぎつつあるが、底に容量を墨書した太型の長頸壺が見つかったことから「中身はこだわらないが運搬用容器」説を主張(9)されている。

また、長岡京跡の調査に携わった山中章氏は、関東から東北への分布と「堅牢で、ひもで肩からつり下げるのに適した形」から「軍隊の水筒」説(10)を提示し、2007 年の国立歴史民俗博物館で企画展示「長岡京遷都一桓武と激動の時代」では、壺 G が長岡京とそのころの東北支配の拠点地と東日本で多く出土していることを強調、「特異な形式をもつ壺 G の移動に代表される物流の進展」という趣旨で、各地の壺 G が展示された。そしてその中に、村上込の内遺跡の壺 G も、武蔵国府や佐倉市、酒々井町から出土した壺 G などと並んで展示されていたが、筆者はその趣旨と解説には違和感を覚えざるをえなかった。なお、その後山中氏は「酒徳利」説も一案として言うておられる(9)ようである。

一方、佐野五十三氏は「仏時使用の花瓶（けびょう）」説(11)を提起、仏像・絵画など



図-2 萱田遺跡群北海道遺跡出土の長頸瓶

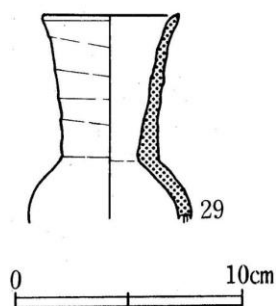


図-3 井戸向遺跡の長頸壺

の資料に残る花瓶を検討整理する中で、観音像の持つ古代花瓶の形状と須恵器壺の変遷の関連を分析し、その形態と時期が一致することを指摘、仏の手を離れて自立式となり花活けの花瓶となった須恵器こそ壺 G であると述べている。(図-4)

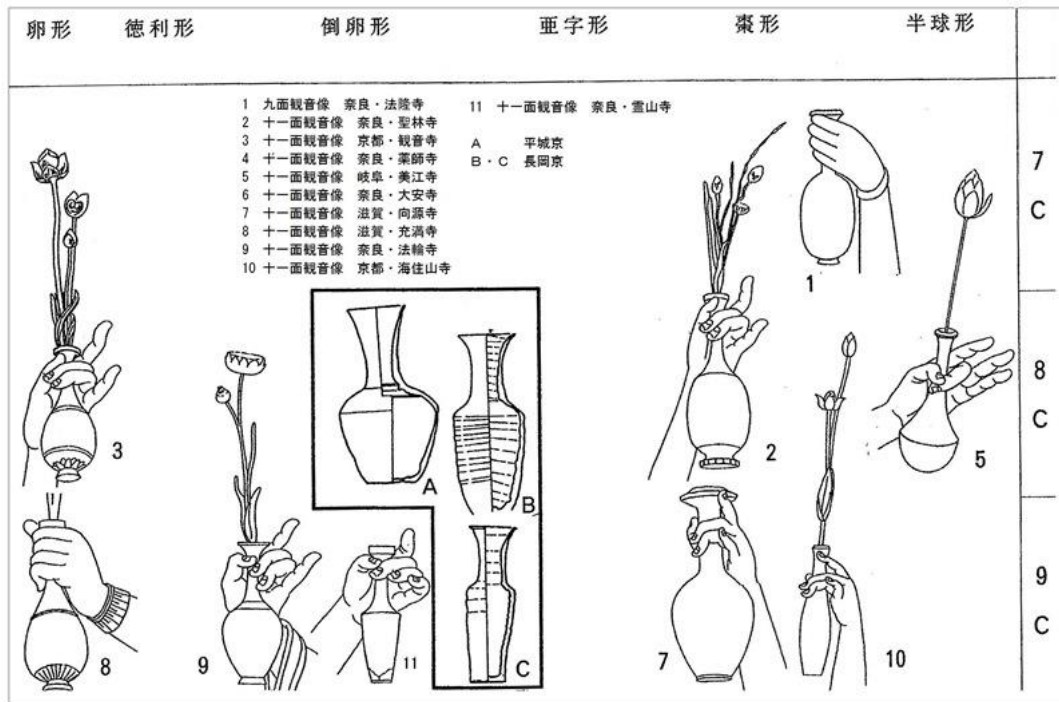


図-4 仏像の持つ花瓶と壺 G (文献(9)の第3表「古代花瓶の変遷」を一部改編)

さらに「壺 G の成立と伝播」(6)では、出土した遺跡と型別の分布の関連を整理し、「壺 G は、古代の公的な施設・機関に関係する遺跡が圧倒的に優位であること」、「集落からの出土も一般的」で、東国では堅穴住居から奈良三彩・金銅仏などが出土している傾向もあり、「遺跡の性格の判断を困難にしている」と課題も提起した。

その後、佐野五十三氏は、筆者も聴講した 2007 年静岡県遺跡調査報告会で、壺 G の花瓶説の根拠として、千葉県袖ヶ浦市遠寺原遺跡・山梨県韮崎市宮ノ前第Ⅱ遺跡、群馬県佐波郡十三宝遺跡の壺 G 出土遺構と遺跡全体の様相を例示し、壺 G が村の寺や仏堂などの遺構に付随する遺物であること、そして行基のような僧を介し仏教の東国へ伝播とともに広がったとの内容の講演をされた。

4 村上込の内遺跡の古代集落の様相

古代の村上込の内遺跡の集落は、出土した土器から 8 世紀前半～9 世紀後半の約 150 年にかけて、Ⅰ～Ⅴ期の 5 段階の変遷をたどったとされる。この 8 世紀前半という時期

は、養老7年(723)「三世一身法」の施行により、郡司層による開墾が進み始めたころであった。

この時期の住居跡 155 軒と掘立式建物跡 24 棟は、集落中央の住居のない広場の周りに、A～E まで 5 つのブロックに分かれて展開する。

墨書土器は 270 点にのぼり、同じ文字の土器が、ブロック単位でまとまって出ていることから、一族のような単位集団が何世代かにわたりおなじブロックに住み続けたと推定され、8 世紀後半から 9 世紀前半にかけて最盛期となり、9 世紀後半には数が減少し、そして 10 世紀頃には生活の痕跡が消える。(県史(2),市史(3))

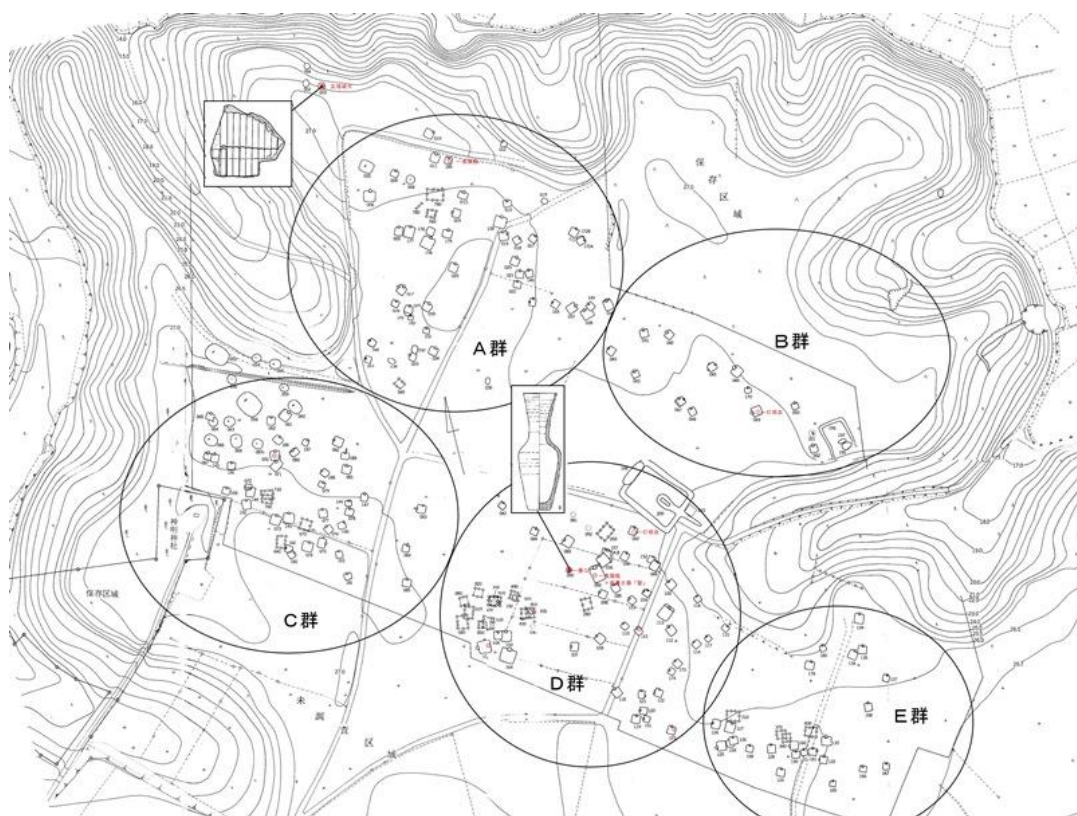


図-5 村上込の内遺跡の遺構配置図 ((1)の付録地図に加筆)

D 群とその隣の C 群からは官人が身に着ける帯金具が検出されている。(3)

また A・D 群では、鉄器(鋤鍬)、A・D・E 群では鉄滓が出土し、小鍛冶の可能性を裏付ける。(2)

壺 G は、報告書(1)によれば、090 遺構から出土。この遺構は集落の南側中央に位置する D 群に属する。この D 群は他の群に比べ、掘立建物数が 13 棟と遺跡全体の半数を占め、「来」「毛」の文字の墨書土器数も圧倒的に多い。

以上のような遺構・遺物の状況から、村上込の内遺跡の集落の中でも D 群には、有力な一族が住んでいて、集落の全体の中心的役割を果たしていたと思われる。

なお、仏教関連遺物としては、集落北はずれの谷に面した部分（A 群の北端）から、瓦塔の破片が出土している。

5 萱田遺跡群にみる古代仏教信仰の痕跡と村上込の内遺跡

笹生衛氏の「古代仏教信仰の広がりを受容」(12)では、古代仏教施設を「寺院」・「寺」・「堂」に分類整理し、「集落内の仏堂・仏教関連遺物のあり方」の事例として八千代市の萱田遺跡群の構造を明らかにし、市史(3)にもその概略が紹介されている。

萱田遺跡群で明確に仏教信仰の跡を確認できるのが、白幡前遺跡 2 群 A 内の南側の遺構で、周囲が溝で区画された四面庇の掘立建物があり、瓦塔・瓦鉢・浄瓶・「寺」や「佛」墨書土器などの遺物が集中することから、ここには集落全体の「村寺」といえる仏教施設があった。

このブロックの北隣の白幡前遺跡 I 群 B と、寺谷津の北側の井戸向遺跡第 I 群では単位集団に付属した一族の持仏堂があり、白幡前遺跡の他の 2 つのブロックと井戸向遺跡第 II 群では一族の内に仏教に帰依した人物がいた程度、さらに北の北海道遺跡では「勝光寺」の墨書土器のみで仏具類は確認できず、権現後遺跡では仏教関連の遺物は全くない。萱田遺跡群では、白幡前遺跡 2 群 A ブロックの「村寺」を拠点として単位集団ごとに仏教信仰が浸透していき、このブロックから離れた北海道遺跡から権現後遺跡にかけては次第に希薄になると考察されている。

ところで、村上込の内遺跡は、古代村神郷内の複数の集落のひとつで、(萱田遺跡群のいわば「萱田村」と並んで、「村上村」を構成する遺跡であるが、その仏教関連遺物は、集落北はずれの瓦塔のみである。笹生氏は、これを「単位集団から独立した堂。集落全体の信仰対象となる仏教施設」と位置付けている。(12)

なお、壺 G については仏具とみなしていないので、以上の検討の要素とはなっていない。

6 壺 G と仏教関連遺物が伴出した千葉県内の遺跡

千葉県史や八千代市史では、壺 G と古代の村落の寺や堂との関連については触れていないが、各地の発掘調査報告書の中では『墨木戸遺跡（第 2 次）』(13)で、同遺跡出土の壺 G を仏器の一器種として遺跡の性格を考察する試みがされている。

以下に、上記報告書(11)で千葉県内の壺 G と仏教関連遺物が伴出した遺跡として挙げている 1.～8. の 8 例と、筆者が加えた 9. 以下の事例を紹介する。

1. 船橋市海神台西遺跡＝墨書土器「寺」
2. 八千代市北海道遺跡＝墨書土器「勝光寺／大田」・「尼」・「経」

3. 八千代市井戸向遺跡＝仏鉢・三彩托・三彩小壺・銅造宝冠如来像・山吹双鳥鏡・墨書土器「寺坏／寺」・「寺」・「佛」
4. 山武郡芝山町庄作遺跡＝仏鉢・瓦塔・墨書土器「井／佛西」
5. 山武郡成東町真行寺廃寺＝仏鉢・浄瓶・香炉蓋・瓦塔・墨書土器「武射寺」・「大寺」・「仏工舎／小」・文字瓦「寺／寺□（天力）」
6. 千葉市台畑遺跡＝墨書土器「寺吉」・「寺」他
7. 千葉市南河原坂窯跡群＝仏鉢・水瓶・香炉蓋・高坏形香炉・墨書刻書土器「堺寺／上」
8. 富津市川島遺跡＝水瓶・香炉蓋・高坏形香炉
9. 市原市草刈遺跡＝灰釉浄瓶・墨書土器「草苺於寺坏」
10. 市原市永吉台遺跡遠寺原地区＝四面庇建物など・瓦塔・瓦鉢・水瓶・香炉・灯明皿・墨書土器「西寺」「土寺」「寺」「山寺」「僧」「佛」
11. 佐倉市高岡大山遺跡＝四面庇建物・銅鉢・瓦鉢・香炉・墨書土器「寺」「佛」「神」
12. 佐倉市臼井屋敷遺跡＝三彩托・総柱建物（神社・寺院か）
13. 市原市坊作遺跡＝墨書土器「法花寺」「佛騰」「造寺」

7 村上込の内遺跡の仏教関連遺構・遺物の様相と壺 G について

県史(2)や市史(3)では、仏教関連遺物として取り上げているのは、A群の北の谷の縁(003)から出土した瓦塔破片のみであるが、筆者は報告書(1)から宗教関連と思われる遺物をピックアップしてみた。(カッコ内は遺構番号)

- ・A群＝長頸瓶（完形 185）、墨書土器「奉」(038)・「前升」(037 註 2)・掘立建物 3 棟
- ・B群＝灯明皿 (049)
- ・C群＝長頸瓶（太型・胴部 070）・掘立建物 4 棟
- ・D群＝長頸瓶（壺 G 中細型完形 090、太型か 111、中細型頸部のみ 123、頸部のみ 104、胴部破片 093&156、093&099、105&109 註 3）、灯明皿（093、097）、墨書土器「聖」(093)、掘立建物 13 棟
- ・E群＝掘立建物 4 棟

以上のように、D群には、長頸瓶が計 7 個体、灯明皿が 2 点、「聖」を墨書した皿などが集中している。

壺 G を出土した 090 遺構は、不定形の浅い窪みで、甕 7 点・甗 1 点・坏 6 点が投棄されたような状態で破片として出土していて、「ごみ穴的なもの」と報告されているが、このうち坏の 1 点は高台付の須恵器で、日常雑貨とは区別されると思われる。

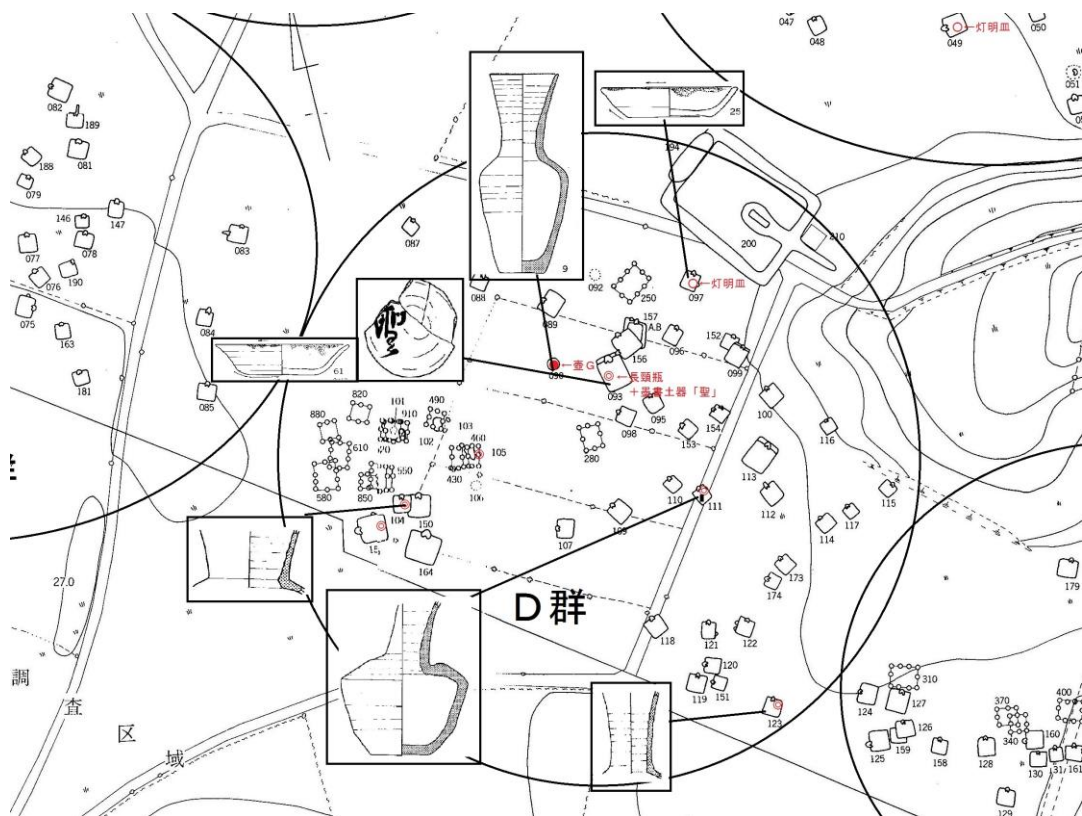


図-6 村上込の内遺跡 D 群の遺構と遺物（長頸瓶・灯明皿・墨書「聖」土器）の配置図

この遺構に隣接した 093 遺構は竪穴住居跡で、他の遺構を比べて多量の土器と鉄製品（刀子・紡錘具など）・銅製品（帯金具）・鉄滓などが集中して検出された。口縁部内側に油性のススが付着した坏は灯明皿であろう。墨書土器は「来」字が多いが、皿に墨書された「聖」の字については、仏教に関連する文字（註 4）として注目される。

灯明皿は、090 遺構の北隣の掘立建物の先の 097 竪穴住居跡からも出土している。

萱田遺跡群のように仏教遺物と直接関連づけられる遺物かどうかは、まだ検討の余地があるが、村上込の内遺跡の D 群には、この集落全体をリードし、「来」の墨書で土器を区別する有力な一族が存在し、その単位集団内には、灯明を捧げ、須恵器を供えて祈る施設（お堂）があったであろう。それは 13 棟の掘立建物のうちのどれか、おそらく 090・093・097 遺構に挟まれた掘立建物の 250 遺構、または 093 遺構の南側の 280 遺構がそれにふさわしいのではないかと思います。

8 おわりに

八千代市郷土博物館に展示されている長頸瓶（壺 G）の正体とは何であろうか、という素朴な疑問から、県史・市史・論文にあたってみたが、明確な答えはなく、仏像の持

つ花瓶にその形状が一致するという佐野氏の説に着目して、村上込の内遺跡の調査報告書(1)を分析し、また、千葉県内外の遺跡のデータを集成してみて、やはりこれは仏教関連遺物であろうと推定される結果となった。

村上込の内遺跡の仏教施設は、A~E のどの群にも属さない北はずれの瓦塔が集落全体の礼拝対象であっただけでなく、集落全体を率いる D 群の有力者一族の単位集団内にも持仏堂のような施設があっただのではないかと考えられる。

さらに、今回は触れなかったが、萱田遺跡群でも、壺 G が見つまっている北海道遺跡と井戸向遺跡の仏教関連の様相については、再検討の余地があると思われる。

村上込の内遺跡は、村神郷の中でも主要な集落であり、八千代市の古代を考える原点である。その遺されたモノから、生活を営んだ人びとのこころが見えてくれば幸いである。

参考文献

- (1) 天野努他 1974『八千代市村上遺跡群』(財)千葉県都市公社
- (2) (財)千葉県史料研究財団編 1998『千葉県の歴史 資料編 考古 3 (奈良・平安時代)』
- (3) 八千代市史編さん委員会編 2008『八千代市の歴史 通史編 上』
- (4) 宮澤久史 2012「3 考古学からみた村上地区の概要」『史談八千代』第 37 号
- (5) 藤岡孝司他 1987『八千代市井戸向遺跡』(財)千葉県文化財センター
- (6) 佐野五十三 1999「壺 G の成立と伝播」『静岡県考古学研究』No.31
- (7) 巽淳一郎 1991「都の焼物の特質とその変容」『新版 古代の日本 近畿Ⅱ』角川書店
- (8) 瀬川裕市郎 1997「堅魚木簡にみられる堅魚などの実態について」『沼津市博物館紀要』21 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館
- (9) 戸田聡 2006「とくだね紀行 静岡県・壺 G の遺跡」『読売新聞』10 月 30 日夕刊
- (10) 山中章 1997「桓武朝の新流通構造：壺 G の生産と流通」『古代文化』第 49 巻 11 号
- (11) 佐野五十三 1998「須恵器花瓶の成立—仏の手から塔婆の世界へ—」『静岡県考古学研究』No.30
- (12) 笹生衛 2005『神仏と村景観の考古学—地域環境の変化と信仰の視点から』弘文社
- (13) 小倉和重 1999『墨木戸遺跡 (第 2 次)』(財)印旛郡市文化財センター
- (14) 新川登亀男 2007「聖は聖を知る」『聖徳太子の歴史学』講談社

註 1 「長頸瓶」の名称は文献の(1)による。長頸壺・須恵器小型壺などと記載されている報告書も多い。

註 2 墨書土器「前升」の「升」は「菩薩」の文字の冠の略との説もある。(13)

註 3 「&」と遺構番号は、長頸瓶破片が異なる遺構で出土し、同一個体として接合することを表す。

註 4 古代の「聖」(「日本書紀」の「玄聖」)は「釈迦ないし仏法の徳を秘めた聖人」を意味する。(14) この文献(14)については、増尾伸一郎氏(東京成徳大学人文学部教授)のご教示による。